



フランス現代哲学の長老であるナンシーは、東日本大震災と福島原発事故に対し、文明的な視野で応答している。

ナンシーによれば、三・一一によって再検討を強いられるのは、「すべてを等価にし、交換可能にする」という「貨幣」の威力である。一般的等価性。マルクスによると、何にでも交換可能なモノである「貨幣」は、一般的等価性の具現である。

フクシマのあとで

ジャン＝リュック・ナンシー 著
渡名喜庸哲 訳

電気エネルギーの問題は、複雑に相互依存する現代社会の全活動に及んでいる。三・一一の衝撃は、日本のあるところ、世界のあらゆるところに及ぶ。そこでナンシーは問う。

三・一一は、すべてを等価にする。グローバルビジネスをも

共に存在することとは

にし、交換可能にしていくことの「破局」を示しているのではないか。この問いは、資本主義の全面化への批判に他ならない。

そこでナンシーは、ものごとの個々に異なる「特異性」を無化し、ひとしなみに扱うことの根本的な暴力

性、存在論的なレベルでの暴力性を批判する。

逆、本書でナンシーは、存在するものごとの間の「差異を尊重すること」を、あらためて提案するのである。三・一一は、すべてを等価にする。グローバルビジネスをも凝らすための批判が、いつでも欠かせないのである。

もっとも効率的に回せるといふ勢いに身を任せていると、人々それぞれの、ものごとそれぞれの事情を軽んじることになってしまう。

それではまずいのだ。とはいえ、ナンシーにしても、資本主義を止めることにはできないと見ている。が、そ

「福島民報」

◇以文社・二五二〇円

評家、立命館大学院准教授・千葉雅也